

182.成人の無菌性髄膜炎を適切に診断する上で有用な因子の探索

研究の概要

無菌性髄膜炎は、ウイルス感染が主な原因で、特異的な治療を要せずに軽快することが多いですが、時に脳炎、水頭症といった重篤な合併症を併発することがあります。診断する際に重要な徴候や所見として、頭痛、吐き気、項部硬直、Jolt accentuation、ケルニツヒ徴候、ブルジンスキー徴候などがありますが、いずれも非特異的なもので診断確定には髄液検査が必要です。その髄液検査も、合併症のリスクがある侵襲的な検査なので、検査を躊躇することで診断が遅れる可能性があります。そのため、無菌性髄膜炎の可能性を予測した上で、髄液検査を行うことが適切な診断を行う上で大切です。しかし、無菌性髄膜炎の適切な診断に焦点をあてた研究は多くありません。

今研究の結果から、無菌性髄膜炎の診断に関する要因や診断が遅れる要因を抽出することができれば、今後の臨床現場で、無菌性髄膜炎の適切な早期診断に繋がる可能性があります。

研究の目的と方法

今回の研究の目的は、当院に入院した成人の無菌性髄膜炎の患者を対象に診断が遅れた要因を検討し、適切な診断に有用な因子を探索することです。

本研究では、2013年1月～2022年12月に国立病院機構熊本医療センターで無菌性髄膜炎と診断された方を対象としています。患者背景（年齢、性別、慢性頭痛の有無、精神疾患の有無、解熱鎮痛薬の使用の有無、免疫抑制状態の有無、先行抗菌薬治療の有無、先行感染の有無）、状況要因（発症から受診までの期間、初診の病院、初診の診療科、初診の時間帯、発症季節）、疾患要因（最高体温、頭痛の有無、倦怠感の有無、嘔気嘔吐の有無、羞明の有無、関節痛の有無、発疹の有無、項部硬直の有無、Jolt accentuation陽性の有無、ケルニツヒ徴候の有無、ブルジンスキー徴候の有無）、初診から髄液検査までの時間、血液検査データなどを電子カルテから集計します。

本研究の参加について

これにより、患者さんに新たな検査や費用の負担が生じることはありません。また、研究で扱う情報は、個人が特定されない形で厳重に扱います。

ご自身のデータを本研究に使わないでほしいと希望される方、その他、研究に関してご質問がございます際は、末尾の問い合わせ先にご連絡ください。

調査する内容

本研究は、新たに試料・情報を取得することはなく、既存カルテ情報のみを用いて実施する研究です。研究対象者（患者さん）の個人情報（氏名、住所、電話番号、カルテ番号など）は記載せず、対応表を作成して管理しますので、個人情報は特定されません。

調査期間

研究対象期間：2013年1月1日～2022年12月31日まで

研究実施期間：2023年4月1日～2027年3月31日まで

研究成果の発表

調査した患者さんのデータは、集団として分析し、学会や学术论文で発表いたします。また、個々の患者さんのデータを発表するときも、個人が特定されることはありません。

研究代表者

国立病院機構熊本医療センター 総合診療科 國友耕太郎

当院における研究責任者

国立病院機構熊本医療センター 総合診療科 國友耕太郎

問い合わせ先

国立病院機構熊本医療センター総合診療科 國友耕太郎 電話：096-353-6501